

視察報告

学生チームによる小豆島調査¹⁾

Iターン・Uターン，産業から瀬戸芸まで～島外の若者視点を通じて

中川 啓子

I. はじめに

オリーブや醤油，素麺などの産地として有名な小豆島は，瀬戸内海では淡路島に次いで大きな面積をもつ島である。瀬戸内国際芸術祭やIターン者・Uターン者の増加などで島は大きく変化しつつあるが，人口は減少傾向にあり，特に生産年齢人口の増加が今後の課題となっている。

今回の視察は，学生（都会に住む若者＝島にとって観光客であり将来的なIターン者候補）が島をどう見て，どう感じるかをテーマに据えており，若者目線での調査²⁾を行うため，追手門学院大学の2回生6名とともに成熟社会研究所員3名が小豆島に渡った。現地視察期間は2016年10月9日～10日の2日間である。

II. 調査概要

調査は大きく2つの手法で行った。一つは島内スポット視察，もう一つは島民へのインタビューである。視察の対象は，瀬戸内国際芸術祭・観光名所・産業・商業スポット・島の町並みや自然景観などで，インタビューの対象は学生と比較的年齢に近い30代のIターン者・Uターン者とした。

学生は2～3名のチームに分かれて行動した（初回のインタビューのみ全員で実施）。若者の率直な視線で捉えることを重視し，島内視察のルートや行き先などは，一般観光客同様の既存情報源（観光ガイドブック，現地配布の地図など）を活用して全て学生自身が決めるようにした。また，インタビューでの質問事項なども学生がチーム内で相談して準備した。

成熟社会研究所は学生チームに付き添いながら参与観察を行った。

視察を終えた後は，学生自身が調査レポートをまとめた。調査内容を整理し，レポートの構成を考え，文

章と撮影した写真を使っての編集作業を行う会議を，大学で6回開催した。



写真1 島民インタビューの様子



写真2 調査内容を整理する学生メンバー

III. 学生の視点から見たこと

調査を通して見た学生の視点・関心は概ね以下のようなものだった。

3-1. 瀬戸内国際芸術祭への関心の低さ

その低さはこちらの予想以上のものだった。秋会期

開催中にも関わらず、学生が視察コースに芸術祭を組み込むことはほとんど無かった。芸術祭のパスポートや観光冊子などを手にしても、そもそも何をしているのか、何をどう見たらいいのか、といったことが分かっていない様子であった。

3-2. 島の食や風景に魅力を感じる

「みかん狩り」「小豆島バーガー」「すもものソフトクリーム」など、島で楽しめる食の数々に大いに惹かれていた。

また、アート作品への関心は低いですが、路地を楽しむ「迷路のまち」や景色のよい「高見山展望台」など、町の風景に魅力を感じていることも分かった。凝った仕掛けよりも素朴なものが新鮮に映ったのかもしれない。

3-3. 移動困難でも訪れたい場所

島内の路線バスの種類や時刻表が複雑であるため、移動には苦勞を強いられ、予定通りに回れない場所も多数あった。しかしそれが原因で島の印象が大きく悪くなるようなことはなく、皆、「今回行けなかった場所に次はぜひ行ってみたい」という思いを語っている。アクセスの苦勞よりも島の魅力が上回ったといえよう。

3-4. 交通手段自体を楽しむ

バス以外にも、レンタルサイクルや渡し舟を使った学生チームもあった。移動手段というよりも、乗ること自体を楽しんでいたようであった。

3-5. 島暮らしへの憧れ

インタビューを通じて島の方々が語った、家族との時間や地域文化を大切にしている暮らし、そして島のために何かをしたいという思いを抱く島民の姿は、都市部の学生にはかなり魅力的かつ理想的に映ったようである。

直接対話して聞いた生の声だからこそ、学生の心にしっかりと響いたのではないだろうか。

IV. おわりに

調査に同行しながら感じたことは、島民の心遣いや、程よい距離感が大変心地良くあったことだった。多くの観光客やIターン者・Uターン者を受け入れている島全体の懐の深さがそう感じさせたのかもしれない。

学生も調査を通じて実際の小豆島を見て歩いたことで、島への愛着を深めたようで、「ぜひまた行きたい」という声を何度も聞いた。

島の自然や食、産業に惹かれたのはもちろんのこと、インタビューを受けていただいた方々、視察中に会った多くの島民の方々の「人となり」に魅力を感じたようであった。

小豆島では、多様な人が出入りし、交わり、様々な形で島を盛り上げ、島を支えている。

今回調査に参加した学生もまた、この先なんらかの形で小豆島とつながりを持つかもしれない。

小豆島は今後、どう変化していくだろうか。



写真3 小豆島の海辺

謝辞

学生チームによる調査にあたって、インタビューに快く応じて下さったIターン者・Uターン者の皆様、小豆島の島民の皆様に、厚く御礼申し上げます。

注

- 1) この報告文は、2016年12月に成熟社会研究所が作成した『若者からみた小豆島の生活、芸術祭、Iターンについて その課題と可能性についての調査研究 報告書』に基づきながら、視察報告として書き下ろしたものである。
- 2) この調査は、成熟社会研究所と株式会社メッツ研究所との共同研究として実施した。